

校友會誌

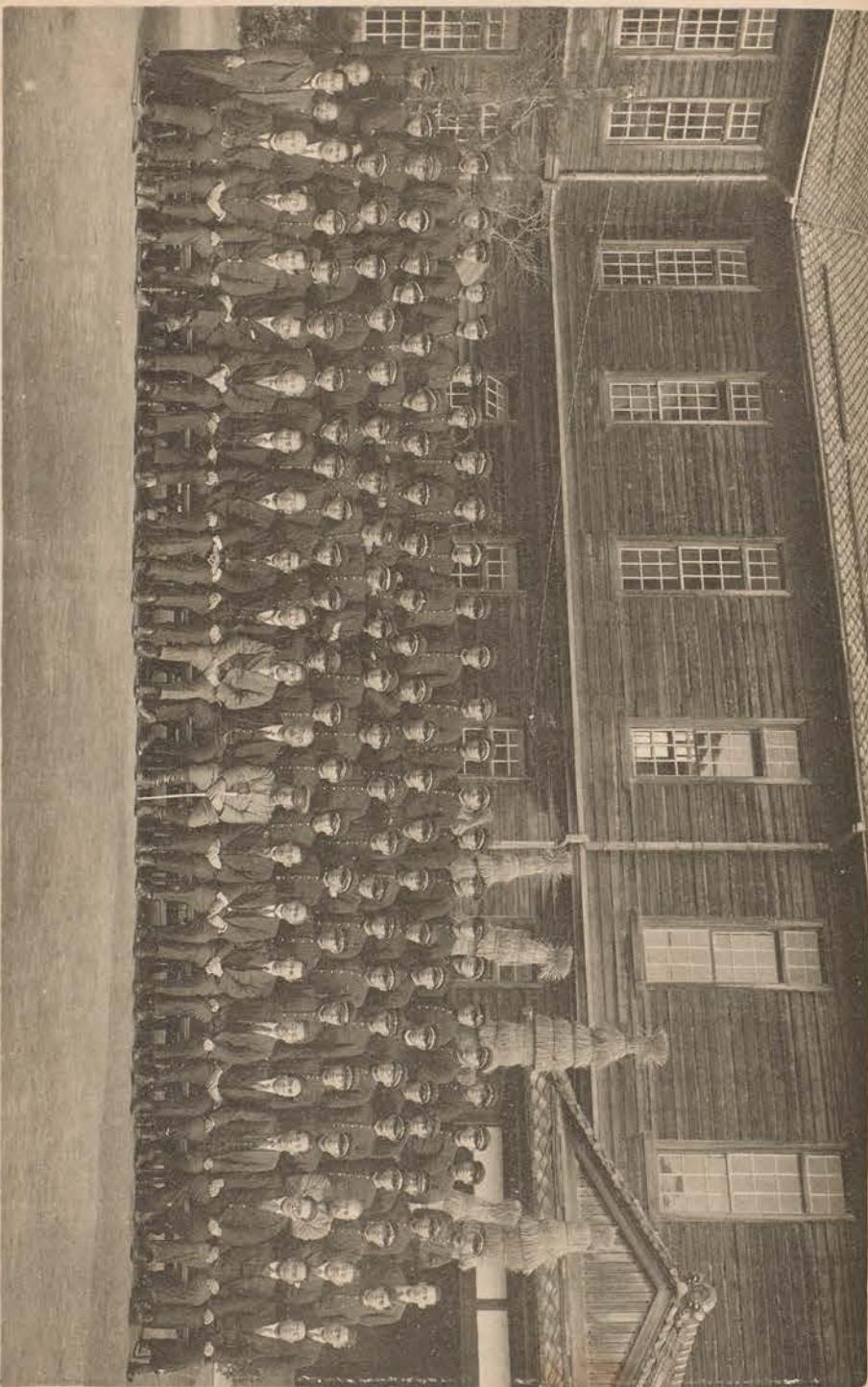
第三拾九號

昭和五年三月

滋賀縣立產根中學

校 友 會 誌

第十三九號



赤城登の旅へ
各山山山山山山
部部部部部部部
競球道艇球技
武短野庭競
伊吹登嶽
富敦伊白
△

部 部 部 部 各
部 部 々 部

四年	三年	二年	三年	四年	五年	六年
澤淺	竹	若茶	組川	藤一	久目	高宮種
島烏	田内	原	木澄	加田	馬田	泉東
希一	平三郎	文五平	伊三郎	健重	幸榮	捨浩
一	一	一	一	嘉一	藏衛	一三三仁三雄
八八	九〇	九七	九九	一〇五	〇六九四一	二七六一二
八七	八八	八八	八八	一一〇	一一〇	一一六二二九
八七	一	一	一	一	一	一六六一三五一六四

秋蚊の種類 ◇ 旅行記

◆旅行記

水泳部 ◆ 雜錄

彦根中學校々歌

湖べの春にかざられて
雲ふきはらふ膽吹山
ふもとの若葉あたらしく
われらが園はかがやけり
綠しづけき學びやに
智徳のとばそ啓きつゝ
明あけはなれゆく人の世の
われらが窓に光あり
不撓の決意と力行の
わかき生命にまもられて
幸とはまれに美はしく
われらが園はかがやけり

剛健自助の門によりて
湖畔のまもり嚴かに
たてる金龜の學びやの
ああほまれある幾春秋
金剛不壞のこゝろもて
つとめ勤しむ森のかげ
われらが窓の燐爛と
ああほまれある幾春秋
天のかがやき地に享けて
金龜の春ととこしへに
われらが園は新たなり

侏儒の白夢（隨筆）



序

詩

ただれたる朱きほのほ
鎧えたる甘き匂を放ち

南國の陽は

柳子の木ちかくもゆ

びらら びらら

葡萄の熟したるかぐはしき

南國の微風に

翻りゆるる柳子の青き葉

平

井

乙

磨

彦根中學校校歌

ヘ調四分ノ四拍子

1=96

5 5 1.5 | 3 2 1 - | 5 1 2 3.1 | 5 --- 0 |

ウミベノ ハルニ カザラレー テ
みどりし づけき まなびやー に
フダフノ サダト リツカウー ノ
がうけん じじょの さによりー て

6 6 5.5 | 4 4 2 - | 5 3.2 1 2 | 3 --- 5 |

クモフキ ハラフ イアーキヤ マ
ちさくの さぼそ ひらーきつ つ
ワカキイ ノチニ マモーラレ テ
こはんの まもり おごーそか に

5 5 3 7 | 1 2 5 - | 1 2 3 4.3 | 2 --- 0 |

フモトノ ワカバ アタラシーグ
あけはなれゆく ひこのよー の
サチトホ マレニ ウルハシーグ
たてるこんきの まなびやー の

f
5 5 3.5 | 6 6 5 - | 1 2 3.2 | 1 --- 0 |

ワレラガ ソノハ カガヤケリ
われらが まどに ひかりあり
ワレラガ ソノハ カガヤケリ
ああほま れある いくしゅん 秋

まどろめるは旅の侏儒

遙なる思ひを孕むざほんの

紫の果肉にも似たる椰子の幹に憑りて

ひようひようと白夢は續く

ば、れんの秘法を弄ぶ 奇しき

けだもの模すらも喰ひあましたる

一九二九年文學鬪争こそは

あはれ！ つきざる侏儒の白夢なりし

ぶるじよあー文學

青い巨濤のやうな草原を足どり軽く奔馳した昨日の麒麟よ輝きのない濁眸よろぼへるその肢態は明に今日の駒馬である暗示に富み躍動を示唆した昨日の作品は今日への遺物以上のものではない

見よ！ 揚棄すべきスローガンも唱導すべき理論も明日へのものは持ち合せないではないか

主張のない文學粉黛によつてのみ餘喘を保有する御身等には一九三〇年から恭しく弔辭を贈呈するであらう

ぶれたりや文學

ぶれたりあいでおろぎーを真向から振り翳して嵐渦のなかへ突進した勇敢ない、とぶれたりあーとよ

文學の發生期に於けるらふな躍動的な情熱的な而も理論といいでおろぎーを具有する君等は明日の民衆から握手を希求されるで

あらう だが然し

情炎に焦れたぶ、れ、あー、とよ 君等は餘りにも大きな誤謬を抱懷してはゐないか
侏儒は指摘するであらう 君等が偶像にまで崇拜するまるきし、ずむ文學論はいでおろぎーを過重するあまり文學を政治に從屬せしめて階級鬭争への目的文學たらしめてゐはしないか
文學至上主義は文學を驅つて墓穴へ急ぐもの けれども決して文學は目的それ自身でも意識それ自体でも勿論政治に従属すべきものでもない

何が藝術的たらしめるか

藝術的な貴い香氣を放射させる本源は感激である 感激以前のものは目的であり意識であり思想である 感激にまで高潮瀕過されたものののみ純粹な藝術的作品として許容さるべきであらう

美

一枝のばらは色彩と形態を提供するにとどまる 美の相違は認識に於ける價值判断の相違以外のものではあり得ない
だから一枝のばらにも近代的な尖鋭な美が包藏されてゐるであらうことを暗示し示唆するであらう

詩 一 篇

「地平線」最も明い太陽の光へ十五角形の影（長さ一米）……三十の煙十二十三の砲火……」（マリネツツイ）
この未來派の詩を認めるべく君等の詩的なるもののかてごりーは餘りにも古びてゐる

もだにすむ

百合の球根を剥いた猿は何が故にその赤い顔と赤い尻とを一層赤くしたであらう
もしもだにすむが派生した要素を一枚一枚捲つたら以外にもその中からぱりすむが示現することに驚倒するであらう

あめりかにすむ

めかにすむ+ばんまつてあるやがて人間は機械に驅使される日を招來するであらう
庇を貸せて母屋を取られるどんきほいでこそは廿一世紀の人間かも知れない

とるすとい

とるすといの人生論に

「何事でも一旦その道に入れば無限に深いひろがりを持つ」と

う
た

「うたは悲しき玩具だ」と云つて嘆いたのは啄木である
だが新興短歌歌人の一部の人々は歌を提げて勇敢に嵐のなかへ突進してゐる
社會運動へまで歌を参加させたことが不可いと
云ふ暴論は許容されない

歌は昨日まで悲しき玩具であつたが故に明日も尙玩具であると云ふ愚論は一九二九年以前の產物であるに違ひない

ぶるのうた

幽玄であり静寂であつたもの それは昨日まで至上の美として容認されたものである けれど今日の美ではあり得ないかも
知れない（勿論美の一的部分ではあるが）現代人は動的なもの鮮明なものの放射的なもの——もだにすむ、あめりかにすむの美を
より多く愛好享樂する 見よ！飛行機の快適な爆音。汽車のすばらしい幕進。汽船の蹴破る白波息づまる野球競技猛ならぐ、
びい、——すべて街上で聞くであらうてんぼの早いものこそは現代人の美的要素である
行き詰れる定形律短歌（史的本質的な検討は紙數の都合上割愛しなければならない）は一九三〇年のうたではない

ぶるのうた

ブレーキをしめるときもベルトをかけるときも飯くふときも黨を忘れまいぜおいらの黨を

これは穴掘り仕事樂ではないがエンヤラ堀れおいらの黨の土臺を据ゑるのだ

この鎌、とげばとぐほど切れる鎌、おいらの腕で握られてびかびか光る鎌

立毛差押への話が地主の間でまとまつたと云ふぢやないか！ おれらを餓死させるための相談がよ！

磨がう、鎌を磨がう！ 立毛差押への立札はおれらに切れと突き立した地主の×だ——以上短歌月刊より抄——

一九三〇年の歌壇に重大な役割を演じつゝ進出するであらう短歌である だが依つて觀る如く明に短歌としては許容されない不純物を含有する 侏儒はぶろ文學論にその迷蒙を指摘した如くぶれたりあ短歌にも同一の論を繰返へさなければならぬ
い ぶろのうたは意識乃至は目的そのもの露出に過ぎはしないか
だが昭和四年のぶろの歌は發生日尙浅きを以て觀過するだけの雅量は有するも昭和五年に於ては何等かの形に清算されるであらうことを見つける

侏儒のうた

定花翁最作集でまとめてある傷風に最近一世一書を表題とする自由詩論者に移行した。何方故にさうさせたかは述べる餘紙を持たないので茲には唯侏儒の短歌をその移行順に並列するであらう。その何れにより詩的なものを味ひ得るか批判がいただければ望外の喜びである（微笑しいろまんちすと時代の作品は茲に掲載することを避ける）

百舌鳥とびてゆらぐさえだの木蓮の花くづれたりなにかさみしき

しつとりと朝じめりたる山梔子の匂ひしたしき雨あがりなり

旅にゐてひととせぶりに我かへる土蔵の前のま青きくわりん

たるみたる母の寝顔をしみゞとめざめてみたり蚯蚓なく夜なり

ひえびえと宵の小雨に群立てる紫苑の莖のぬれ真青なり

秋ふかきひとたれもゐぬ棲橋のとつぱしにゐて遠き雲みる

しんしんと陽は降りながら秋の波つめたく光る晝のまさかり

籠さげた娘にあへばふかしたての譜の匂ひがほのかにするも

片かげり風ふきくれば頬白はしづ枝にうつりひそまりにけり

黎明の冷えた空氣た露しげき南瓜畑の青きひろがり

ほがらかな朝の挨拶だ生徒等のあかるいひとみがこぼれてゐるも

生くることをよろこべるらしかがよへる生徒等の眸のあかるさを見よ

すみきつた朝の空氣をふるはせて生徒は讀本をほがらかによむ

間の燈のひかりつめたく初冬の一天青し腹ひえわたる

泥まみれな靴の重みが一生涯つきまとふのかといやになつちまふ
夕暮の雪の反射で泥まみれの編上靴のひもをといてる
白木蓮の咲ききつてゐる木の下で冷えた空氣を存分にすへり
朗かな健康を身ねちに感じつつ歯をみがきをり白木蓮の花

すみきつた黒い眸の少年がスタートラインにすらりとならぶ

スタートラインにならぶ少年の息をひそめた眞面目な顔

ぐんぐん荒いタツチで純情な生徒の心がぢかにふれる

わがつけた情熱の火がしづかに生徒の心にもえてゐる

ひたむきに何か得ようと生徒等は私の方へ觸手をのばす

ぐつと私を摑まふとする純情に世すぎになれた心が恐れてゐる

ひそひそ雨が降つてゐる眞夜なかいまはの父の脈にふれてゐる

慰められたい心でふれた指先にかそかに父の脈をかんじる

うつうつと秋雨がけぶる草原で父の幻をよばふとする

一言もいはずに亡くなつた父がいま私に生きて話しかける

日頃はすつかり忘れてゐた父が忘くなつてからしみじみと感ぜられる（私歌集抄）

御親閲參加所感

組田重嘉

静寂な空氣を徐ろに震はせて「君が代」の軍樂が我々の耳に響いて來た。陛下の臨御である——。

捧げ銃をした我々は石像の如く微動だもしない。十二萬餘の若き魂の間には何の噪音も波動もなかつた。靜肅そのものの私が場内を壓してゐた。只聞ゆるものとては感激に震へてゐる心臓の鼓動と血液の流動する音のみである。興奮した私の耳には號令が夢の様に聞える。

——間もなく練兵場の一隅より起るラツパの合図により分列行進は始まつた。校旗團旗をひらめかし、陸軍戸山學校軍樂隊の奏するマーチに歩調を合せてしづくと行進が始まつた。いよいよ玉座の前線を行進する事になつた。古き歴史を物語る誇りの校旗を先頭に我々は眞砂子を踏みしめて全く我を忘れ息をはづませながらただ一生懸命に行進した。軍樂も聞えなかつた。しかし歩調は不思議に一糸も亂れなかつた。「頭——右ツ!!」

噫、麗はしい大君の御英姿——！

塑像の如く直立し給ひかしくも我々は舉手の敬禮を給つた。我々は夢に夢見る心持で進んだ。何も聞えない。何も見えない。舊位置に歸つた時の皆の顔は緊張と興奮とで蒼白くなつてゐた。

やがてうら若き乙女の奉唱する奉迎歌のメロディーが重々しくおごそかに響き渡つた。

「わが大君、わが大君……」

……われ等をとめ心をどる……」

感激に震へつゝ我々は不動の姿勢のまゝ直立してゐた。

「萬歳三唱」——あゝ、我等は聲の限り萬歳を唱へた。銃剣を高く振り上げて天地も破れよと許りに叫んだ。

「休メツ——」の號令がかゝつた。

「あゝ、とう／＼済んだね！」それが最初のさゝやきだつた。この簡単な言葉の中にはあの時の複雑な感情が悉く包含されてゐた。いろいろの分子の構成する「歡喜」の歎聲であつた。我々は今日の日をどんなに待つた事であらう。日本臣民として之に勝る光榮が何處にあり得よう。身に餘る光榮を受けた後の軽い興奮は何時までも續いてゐた。

あゝ日本は決して亡びる事はない。

上にはあの御若く御英明な天皇陛下がましまして、下にはこの忠義の念に燃ゆる若い幾多の魂がある。宇宙が虚となり無とならうとも我が日の日本の國は永遠の文化燐然、君臣和合の大帝國である事を私は信じて疑はない。

御親閲參加所感

夏川孝太郎

日影の薄い式場内には息詰る様な莊重の氣が満ちてゐる。空の飛行機を見てもアレがメルクールだ。毎日機だと騒ぐ心は起らぬ。頭は前夜來の緊張の爲に何物か重大な壓迫物で抑へ付けられる感じがある。騎馬隊が練兵場に入つて來た。花火が灰色のスレーントの様な空を割つた。

我が校旗は恐らく參加中學校中最古のものだらう。伊井家の實槍を柄にした些か汚れた白縮緬地に黒く一中と書いてある。他校の赤、紫、綠等燐然たるに比して一段の年代的森嚴さで此等を壓して居る。校長は熱の高い病を推して參加されたので手

巾で顔を拭はれるのが度々である。この時この校旗この校長を見七十萬の滋賀縣民の後援を思つて感激と責任感とで已に胸は迫つて居る。

陛下の着御「捧げ銃」の間は天地寂として身体は引しまり唯無我の森嚴に浸るのみ。暫時の後行進曲が奏せられ團旗は波濤の如く走り、谷間の嵐の如き響は、魂を引き抜く様な感激を覚えさせる。

時は來た。樂音は鮮やかになり出した。足並みは確かだ。「頭右」あゝ、陛下は畏くも吾等に舉手の禮を賜うたのである。

前後左右の存在を忘れ、樂音も耳に入らず夢中に手を振り若き陛下を凝視し奉つた。

自分の体が歩いてゐるのではない。魂が一杯になつた感激と至誠と緊張とを以て御前を邁進してゐるのだ。この意氣がなかつたなら身体は御前に狂ひ倒れて了ふ事だらう。日本だ。我等は 陛下の日本人だ！胸が迫つてもう此れ以上言ひ表すことが出来ない。

夢中に驅足して舊位置に戻つてみると、顔は赤くふくれ上り涙と汗と雨とでずぶ濡れである。体は焼ける様だ。

女子奉唱隊の「我が大君」の奉唱を聞くに當つて萬感交々起り瞑想し今日の感激の第一歩を如何なる方面に發すべきかを悟つた。

即ち吾等は日本人である。全力を國の爲君の爲に傾注し強き信仰と理想とで心を勵まし、若き日本の天皇を上に戴いて人種生活に於ける日本を向上進歩させねばならぬといふ民族的感激に浸つた。

そして日本に生れた幸福を歡喜した。

御親閲所感

北

村

清

「日本を背負つて立たう。」

強い確かな歩調に此の意氣が有つた。

銃を支へた堅い鐵骨のはめこまれた腕に、此の鉛氣が見られた。そして誰もの胸に、日本の臣民だ、といふ心強い自覺が横溢してゐた。

いやが上にも勇氣を鼓舞せしめずにはおかないあの軍樂隊の吹奏する輕ろやかな調べ、足どりは、おのづとそれが爲に操つられて行く、のではなく寧ろ熱意のこもつた足どりに、行進曲がピツタリと合つて行く。

あくまで熱意のこもつた音樂とその歩調だ！

この確然たる足どりの中に、我等の眞意は生きたのだ。そして御親閲の分列式は着々と進み、我等も遂に分列式に立つてゐた。

踏み出す、その一步一步に満身の力さへ知らず知らずの中に加はつて行つた。

先頃から曇つた空は、雨さへもおとして來たけれども、それさへ降つてゐるか、降つてゐないかと判らぬほどである。よしんば如何様な大雷雨に襲はれようとも我等は決して恐れなかつたのだ。それほど必死的に夢中だつた。尚も勇往するこの健歩！

尚も勇往するこの健歩！

陛下の御前へは、步步に近くなる。御親閲の榮えは目前だ。足はしつかりと大地を打つ。

やがて錦の御旗の嚴かにひるがへるのを拜した。そのとき我等は

陛下の御英姿を、確かに目のあたり、こんなにも近く拜し奉ることが出来たのである。

歡喜と、莊嚴と、崇敬と

強く強く我等が日本臣民である幸福を感じて、躍り立たん許りの喜びに、感泣したのだ。

あゝ、この光榮！

我等が胸は思はず高鳴つてゐた。

「我が大君、わが大君」女子奉唱隊の奉唱する歌聲も今はこの城東練兵場の上にたなびく瑞雲の奥そこまで、響き渡つた。

若人の真心の響きであるこの聲は、淀の水底深くまでひゞき渡つた。胸にこみ上げる耐へられぬ喜びを表はして、あらん限りの聲に、萬歳を三唱し鳴り響くラッパに最後の最敬禮をして還御を遙かに奉送してゐた。

我等の爲に特に給はつた永久の光榮に對して、我等は學生としてのその本分を勵み、ひたすら皇恩に報ひ奉らうと堅く誓はずには居られなかつた。

雨はこの土地をすつかりと淨化して、大阪城の白壁が綠の中にすが／＼しく浮き立つて映える。

式が終つて後は唯喜びの感想の色とり／＼である。

一九二九、九、二六 再了

御親閲參加所感

大

照

敏

静かな沈黙の中に、時はかすかに聞える息の音と共に段々と過ぎて行く。

天氣は良く晴れてゐない。併し大丈夫だ。御親閲に差支は無からう。こんな安堵を胸に感じつゝ目的の午後二時を待つてゐるすぐ前の工場の煙も止んでゐる。そして傳書鳩だらう。それが灰色の空の中に銀色の翼を翻しつゝ御親閲場を警戒する様に幾度か頭上を飛んで行く。

もう二時迄には間がない。時計は丁度十分前だ。

高鳴る胸をおさへながら「一分二分……」と心の中で算へながら前方をじつと見詰めてゐる。二時はいよ／＼迫つて来る。突然練兵場の一端より勇しく響く喇叭の音。

「時は來れり」私は胸の中でかう叫んだ。いよ／＼聖上陛下の御臨場だ。私は有難い喜びと尊さで思はず心臓のときめきが早くなるのを感じた。

やがて「分列に前へ」の號令と共に諸團隊は動き始めた。「サツ／＼」と勇しく行進をおこして段々と玉座に近い分列線に近づいて行く。軍樂隊の奏樂に良く揃つて行く行進の足音が一つ／＼自分の頭に響いて来て一層嚴かな氣がした。唯私は御親閲の無事のみを祈つてゐた。

玉座はやがて見え出した、そして我が大隊が玉座に近づき松尾大隊長殿の「頭右」の號令がかゝつた時私は夢中で頭右をした。それと同時に白い布で清く覆はれた一段と高い玉座に厳しく又神々しく御立ち遊ばされてゐる。陛下の御姿を目のあたり

に拜しその上に有難い舉手の禮を賜つた時私は餘りの尊さに思はず感激の涙を催した。天皇旗は嚴然と建てられたまゝ風に少しうれてゐる。

玉座の後左右そこには色々な人がじつと私等を凝視してゐるがあたりは總て死の様に静かである。段々と御前を遠ざかり幾千とも知れない拜觀の人々に見守られつゝ舊の位置に歸りつく事が出來た。彼等は皆此の光榮の士を喜びの目をもつて送つてくれた。

やがて女子の奉迎歌も終りいよいよ最後の萬歳を唱へる時私は唯感激に満ち嬉し涙と共に聲を張り上げて 天皇陛下の萬歳を三唱した。

斯くて私は私の一生を通じて二度ない最大光榮に浴する事が出來た。私は尊い天顏を拜する事が出來たのだ。初めて元の自分に歸りながら自分の幸福を喜びもう一度と無い此の御親閥を無事に済ます事が出來たのを喜んだ。

私の頭からはあの 天皇陛下の御尊顔がいつまでも去らなかつた。

青 年 こ 日 本

吉 田 篤 太 郎

徳川幕府の鎖國攘夷といふ堤を切つて、世界の波は滔々として打寄せて來た。東京の日本橋の下を流れる水が、英國ロンドン市のテームス河と連るを知つてから六十餘年、日清戰爭に依つて東洋の強國となり、日露戰爭に依つて世界の強國となり、歐洲大戰に依つて世界三大強國の一に列した。維新以來の短日月に歐洲諸國の二世紀にも比すべき長足の進歩をしたのを顧みれば、新興日本と云ひ、青年日本と云ふ、何れも然りと首肯き得るのである。

我等は我が帝國の將來を思ふ時、此の様な名稱に満足してゐてはならない。世界三大強國と云ふも、畢竟我が國の地理的位置が東洋にあり、我が國を除いて東洋を談する事が出來得ない關係上からではなからうか。七千億圓の國富を有する米國、五千億圓の國富を有する英國に比して、五百億圓の貧弱な日本が、どうして世界の三強國の列に交り得ようか。今や日英同盟も廢止され、米國の反感もあり、彼等にあたるのに亞細亞民族の同盟を以てしようとすれば、背後にある支那では、排日の聲が頻りである。我が國に眞意を持つ國が、何處にあるか。我が國は孤立無援の境遇に置かれてをり、今後は唯我等の足によつてのみ歩まなければならぬ状態にあるのである。

維新の志士は、興國の名義に依つて人を斬つた。我等は劔に依らずして産業に從事する事に依つて、人類に貢献しつゝ國を興して行ける現在に、生を受けたことを歡喜しなければならぬ。暗い工場でハンマーを握る時、それは志士が刀を持つて立つのに劣らない、報國への第一歩を踏み出し得たのである。そのハンマーの響きこそ、我が日本帝國の氣焰であり、祖國日本への吾等の忠義勞働であらねばならぬ。

過去はいざ知らず、現今經濟戰に於ては國の大小は問題でなく、位置の優劣も更に問題ではない。唯國民が一致しての努力こそ産業に於ける一大要素であり、延いてはこれが國家の隆盛を圖る所以である。何となれば、産業の隆盛それ自身はとりもなほさず國家の隆盛を意味して居るからである。

入 學 試 験 撤 廢 を 難 ず

川 島 吉 之 助

幾多の先輩によつて入學難緩和入學試験撤廢等が盛んに叫ばれて居るが、未だ一回として入學試験徹底採用人員淘汰が叫ば

れぬのは何故か？私には不思議でならぬ。

勿論先輩達の叫んでいる事は間違つてゐないかも知れないが、是が果して社會の現象に照らして良策であるか否かは考へるべき問題だと思ふ。

入學試験の不徹底！學校増設に依つて、續出する品質劣等の學生高等遊民の激増は何を意味して居るか。

小理窟のみ並べたてゝ小僧の足にもならぬノラクラ者の續出する時代を考へて見よ。實に情なくなるではないか。

學校は遊場では無い。云ふ迄も無く智能を啓發し德器を成就し併せて不撓不屈の精神を養ふべき目的を有して居る。そこに入學しようとするものに果して教育するに足る素質と要素を有するか否かそれを知るが爲に嚴格な試験を課するのは當然の事ではないか？

今日叫ばれて居る入學難の聲は、皆中流以上の温かい家庭に育くまれてゐる意志薄弱の子弟の泣言か、子を猫のやうに可愛がつて、眞の子弟教育を知らぬ親馬鹿な輩の囁き言としか考へられないのである。

諸君見給へ。當然學徒たるべき素質を持ち乍らも資のない爲に或は小僧となり職工となり、肌刺す寒中に樽拾ひをし或は地獄のやうな處に元氣で働いてゐる下流社會の子弟を!!!

彼等は小僧となるにも職工となるにも激しい競争と雇主の厳格な試験を通らねばならぬ。然し決して彼等は雇主の試験に對してかこつ處か？一日の勞苦に疲れた体をはげまして、夜は遅く迄書籍も文房具も満足に與へられずに苦しい勉強して專檢、高檢進んでは高等試験に迄も突進してゐるでは無いか。彼等は單なる樽拾ひに甘せず慘めな職工に満足せずして、日夜營々として働き餘暇に勉學して決して門戸の狭いを嘆くやうな事は無いのである。生存競争の激烈な社會の眞只中に劉咲たる行進曲と共に活躍期の到来を窺つてゐるのである。

是を思へば温い家庭に親から豊かな學資を受け、意の儘に學校には入らうとする者が、入學試験位に苦しむのは當然の結果では無い。發育盛の子弟を入學試験で苦しめるのは國民保健上の大問題だ。等と叫ばれるのも一應もつともなことである。

然し入學試験位でへこたれる様な體の者を教育したとて何の爲にならう。入學試験位に泣言を云ふ徒輩に何事を期待し得ようか。第一そんな徒輩が入學しようとするその事が已に僭越ではないか。入學試験にへこたれて泣く様な意志薄弱の輩を試験によつて淘汰する時はむしろ現在の學校數は多過ぎる位である。

入學難は我が國の名物だ。外國は無試験で入學出来るといふが入學難が我が國の名物なら名物で結構では無いか？入學難の我が國が不幸か？門戸開放の外國が幸福か？誰か鳥の雌雄を知らんやである。入學難を緩和して否入學試験を撤廢して果して期待するような良結果を生むかどうか却つて情實に捉はれ所謂おべつかの果は、果して智能を啓發し德器を成就する事が出来るだらうか。一利あつて百害が残りはせぬか？私は大いに疑はざるを得ないのである。

學校増設！採用人員増加が教育普及を意味しそれが國民一般の教育向上だと云う事を度々耳にするが、必ずしも學校に入らなければ國民教育の向上が阻害されるなどとは考へられない。

私は叫ぶ入學試験は徹底的たれ、須らく嚴格であれ!!!

而らば學校増設も不可、贈物の心配も無用ではないか。

(完)

四、九、二三

學窓を出づるに際し校友會諸君の振起を促す

川 島 吉 之 助

我等の抱く希望の表徴であるかのやうな初冬の曉に六百の赤鬼健兒諸君に愚言を呈す。

赤鬼魂を以て天下に冠たる諸君よ!!! 翻つて現在の世相を見よ!!! 運動萬能時代とも云ふべき今日我が彦中運動各部の今一段と振起せられんことを望む。

運動各部の選手諸君よ!!! 諸君は、石をも溶かすやうな炎天下に不斷の猛練習をつゝけられ過去に於ける彦中運動各部の不振を拂ひ除いて雄名を天下にとどろかさうと努力に努力を以てされたのであるが、然し時未して我等の望を達し得なかつた事は誠に遺憾とするところである。

戦に破れた時の君等の心中は察するに餘り有りであらう。吾等は只諸君が正義のもとに勇ましく戦はれ且つベストを盡された事を感謝して止まない。我等が諸君を慰安し激励しなかつたことは悪しからず御宥恕を乞ふ。

我は只本年度の應援團の統一しないでまちまちな行動に出たことをうらむ。實際本年度程我が校友會の團結力のかけてゐた事は無かつた。

應援團員諸君よ!!! 我が運動各部選手は我等六百の健兒の代表者であり又一面から見れば犠牲者である。諸君は是の事を十分に記憶して居なければならないのだ。

各部選手諸兄の活躍が我が校の名聲に大影響のある事は毫も學業成績の校名に影響あるのに異らない。

而して運動部選手の努力によつて克ち得た校名の天下に轟くのは吾等六百の生徒の名譽にほかならない。

應援團員諸君は自治の精神に基いて自ら進んで選手を勵まし且つ慰め飽くまで選手諸兄に對して同情の念をもつとしていた

だきたいものである。

選手諸兄よ!!! 彦中の六百の健兒の期待を雙肩になつて立つ諸兄よ!!! 火の出る様な諸君の練習は我が校名を天下に輝がやかさうが爲の練習ではないか。彦中を愛すればこそではないか。

いざ立て友よ!!! 今度こそは兄等が死を決して戦ふべき時である。正々堂々と戰つてくれそして必ず勝つてくれとは獨り吾等が心の叫びではなく、彦根町民否滋賀縣民全部が心から願ふ所なのである。我等は兄等の必勝を信じよう。

さらば戦に臨むわが友よ!!! 賴るべきは兄等の力である。彦中六百の健兒の力の塊である技である。健兒が心を同じうして叫ぶ氣合である。さらば友よ!!! 正義のもとに勇ましく戦つてくれそして必ず勝つてくれ。

終にのぞんで諸子の一致團結して自覺した眞の應援團の生れる日の一日も速かならん事を祈り校友會諸君の振起を促して擱筆する。

我等の進むべき道

一 圓 宣 雄

クロス・カンツリーとは何んであらう。山も谷もあらゆる障礙物を越えて一直線に目的的に達するレースである。此の競技こそ我々の進むべき道を想像せしめるものである。我々が確とした目的を見つめて進んだならば必ず最短距離に於て完全に光明に輝く榮冠を獲得するに違ひない。然し果してこの想像線を豫想通り直行し得られるかどうか。

我々は生徒である限り與へられた課業だけを眞面目に楽しく學び未來に備へるべき基礎を充實せしめることに、専心努力すべきである。かうして第一歩を確實に踏み出さねばならない。

近代に於ては昔のやうに裸身で遊學して大家となるといふやうなことは到底望まれないことだ。

やつぱりそれ相當の學校を卒業しなければ認めてくれぬ世の中なのだ。

かうした世相である以上青年の若い力を捧げて争はなければならぬ所謂受験難の聲のたかい専門學校以上の課程を経ねばならないのである。かうした關門のために落伍するものが世には相當に多い。

さて學生生活を終へていよ／＼實社會に出ようとすると時益々複雜な障礙が表はれて来る。そして皆が皆採用せられ得ないところから就職難が叫ばれてくる。この中を巧みに切り抜けて行かなければならぬ。思へば至難な人生のコースである。

併し人生は相應に精神的にも物質的にも恵まれて居る。何を苦んで自分一人のみあき足らない楽しみを逐はうとするのであ

らう。自分の思を満足するに足らないその結果はどうであらう。嫉妬となり數多の誘惑となつて手を伸ばす。そんな誘惑に傍見でもしようものなら忽ち曲線となつて溝に落ち込んでしまふだらう。かうなつたら浮ばれつこはない。故に何物も當てにならぬ。何時でも何時でも當てになるのは我一人であると覺悟をして自分を頼り多いものとなすよう不斷の修養即ち實力をつけねばならない。

そうして更に一步進んで自分自身の有するものをうまく運用せねばならない。支那戰國の遊説家張儀は零落して都に歸つたとき衆人が嘲笑した。その時彼は妻に「視吾舌尙在否」と言つたといふ。

これは何を意味してゐるのであるか即ち「此の舌のある限り余は必ず成功して見せる」といふ彼の胸深く潜めた決心を示した一句である。

果せるかな三寸の口舌を以つて列國の間に遊説して遂に連衡の盟約を爲さしめたのである。

或は又「我ベンの動く限り我は餓死することなし」といふのを聞いたが實に三寸の舌、一本のベンと雖も之を練れば以て生涯を托するに足るのである。

又世俗に超越して生活其のものはまるで遁世者の様な質素の限りをつくした生活に甘じても實力の發揮に努力し事業の成功へと一路猛進せねばなるまい。常に先導者であるといふやうな泰然とした氣をもつて常に目的から目を放すことなく突進すべきである。

こゝまで来て、過去の想像線を見る時直線的にあらゆる障碍を乗り越え、そして、かうしたことが眞に實行に表はれ得たならば、クロス・カンツリー即ち世の萬難の切り抜けに成功したのだ。

目醒よ若者!!

我々青年たるもの進むべき道の覺悟はただ

我々は危險千萬な道を歩まねばならぬのだから常に細心の注意を以て一步一歩を確り進まねばならぬといふことである。

活躍すべき健男兒

辻

三 雄

男は度胸！と昔から謂はれてゐる。私はこれを千古不滅の金言と考へる。男の特徴は、これであると思ふ。

西郷隆盛は偉大な度胸を有してゐた。偉大な度量を具備してゐた。私はこのやうな人物を、模範とする。世の青年諸君の中に、西郷隆盛を崇拜せられる人を多く見受けるのは、大西郷の度量を崇拜せられるからだと思ふ。私は小我的人物を好まない彼等は小刀細工をするからである。

現代は益々浮華輕佻に流れゆく。何時かは醒める時が来るであらうが、苟くも健男兒として將來に考へる所のある者が、かゝる悪い時代思潮に陥つてはならぬ事は勿論である。

我等が男子たる以上、須らく雄圖を抱いて、世界に雄飛せなければならない。活躍は男子の本懐であつて、人生中一大痛快事である。男子は活躍に際してこそ、男子の本質が、端的に發揮されるもので、女子とは本質的に區別を生じてゐる。

男兒が活躍するに至る迄は、のびる爲に縮むといふ雌伏の生活を必要とする。故に、現在吾等は金龜城下の歴史ある中學の健男兒であつて、學德の修養、身体の練磨をして、來るべき活躍に際しては、十分な飛躍を試みる爲にコツコツと踏み臺の建設にかゝつてゐる者である。而して男子が一旦活躍に際して、明敏な頭腦と深大な度胸とを以てすれば、社會てふ競争場裡に於てよく他を壓して成功するであらう。我等は常に真剣な努力を續けなければならない。さうして成功すると否とに抱らず、常に努力して勇敢な人生の幕を閉ぢるべきだ。其の人生たるや度胸の發露が、人生記錄に在つて始めて、男性的記録となる。

我等はアムビシヤスの健男兒であつて、眞の男に成らうとする卵である。度量ある、悠然たる人物となり、世界をステージ

として、將來の大活躍を期すべきである。

心身の食 物

藤原誠心

人類はいふまでもなく地球上のあらゆる生物は皆食物を喰べて始めて生存するのである。之を欠けば命を保つことの不可能なことはいふまでもないことである。併しながら又之を餘りに喰ひ過ぎれば、この食物の爲に反つて病氣を惹起して一命を失ふのである。ではそれ程重要な食物に對して吾人はそれ相當なる態度をとつて居るか、どうか?……この點はよく考慮すべき點であると思ふ。例へば手近な例を擧げればあの汽車中に於ける辨當の喰べ方はどうだ。……凡そ十人中八九人迄は飯を喰ひ残して、又菜を食ひ散らして勿體なくも臺の下へなげ込んで、平氣な顔をして上品ぶつてゐるのが普通あり勝なことあります。私はあのやうな粗末な様子は見苦しい態度だと思ふ。人中で丁寧に一粒一粒を喰ふのをきまりが悪いと思ふのか、亦人々が見て彼は賤しい者だと思はれるのが耻しいと云ふ心か、近年は益々名譽ばやりで名譽とでも思つてすることか、飯を粗末にする名譽も餘り私は感心しない。兎に角、これは外人の悪い眞似をしたものであらう。私は車中でよくあれを見る度毎に勿體なくしてくたまらない。その一粒と雖も、日本中の人々がそのやうなことをしてゐたならばどんなに大きい損失であらうか。……想像するに餘りである。

抑々地球上の萬物それが穀物であらうが、青物であらうが、又禽獸であらうが、何であらうが、その恵によつて生活していくものであるから何一つとして光明の外はないです。その恵の主は大昔から今も又今後も變りはないのである。然るに現在吾人の命を保つて行く尊い食物を金さへ出せば何物でも喰へると思うて、そのやうな粗末な生活をすれば吾人の食分をへらして

行くばかりではなく必ず後世にはその報ひを受けて、一粒の米さへ食ふ事ができない時が到來して来るかも知れぬ。吾人はこの事を考へるばかりでも恐いのである。さうはいふものゝその人達が家で食物を喰ふ際、茶碗に飯を残してそれをすてゝゐる人は恐らくあるまいと思ふ。若しそのやうな粗末な喰ひ方をしてゐたならば家の者が見ならつて同じことをやるから、そうなると畜生同様である。其の外、食物に限らずすべてに於て注意しなければならない。併しながら食物ばかり喰つてゐても現今の人は世の中に立つて行く事は不可能なことである。そこで誠心を養う食物を與へなければならぬ。この食物は道徳上非常に重要な食物であり、これさへ完備して居れば前述の不行儀な態度は決して起る筈はない。結局吾人はこの二つの食物をうまく適當に與へて行つたならば心身の安定を得ることが出来るのである。

日本海海戦の講話をきて

柴田進

今を去る二十四年の昔、明治三十八年五月二十七日

露國のバルチック艦隊は、ロゼストウエンスキー長官の座乗せる旗艦スワロフを先頭として、アレキサンダー三世、ボロヂノ以下三十八隻、舳艤相衡んで、黒煙滾々として天を覆ひ、威風堂々と白浪を蹴つて遙か隱岐島の西を航行してゐた。一時四十分、旗艦三笠は敵の前路を扼さうとして針路を變へ敵艦隊に向つた。有名な

「皇國の興廢此の一戦にあり。各員一層奮勵努力せよ」
の信號は此の時三笠の檣頭高く翻へつた。

午後一時八分、敵先づ發砲して我が艦を砲撃し、此處に空前の大戦の幕は切つて落された。

我が忠勇な將卒は日本海に於て、奮闘激戦すること二日、二十八日午前十時半には、敵は全滅してニコライ一世の降伏信號はかかるれ、我が國は泰山の安きに置かれた。

かの國を賭して起つた日露戰爭の中に於ても、此の海戰は頗る重大な者であつた。

開戦以來陸に連敗した露國は、最後の手段として、はるばる本國から大艦隊を派して、一舉にして我を屠らうと計つたのである。

若し此の海戰に於て我が軍が露國との位置をかへてゐたとすれば、滿洲の野に戦ふ百萬の大兵は餓死をまねがれなかつたであらう。更に又我が軍の状況は如何に變じたであらうかと思ふとき、其の想像は難くなからう。

然るに、幸にも我が國の大勝に歸したことは、實に慶賀に堪へることである。

幸、我が校は此の記念すべき日に、吳軍需部長富岡大佐殿の御來彥をわづらはし、有益な御講演によつて當時の状況を一層

脳裡に新しくしたことは欣喜に堪へぬ次第である。

大佐殿は先づ國民の状況の如何に其の戦士にあたへる影響の大なるかを説き、日露交戦當時の兩國民の軍隊に對する感じを一々述べ、我々の將來に對する覺悟を示して、いよいよ日本海海戰の話に入り、我等の奮起をうながして降壇された。自分は今その講演を通じて深く感じた事を述べようと思ふ。

大佐殿のお話によれば、日露交戦當時の露國の一般國民の状況は、或る一部をのぞいては、民心皆戰争を忌み、其の出征を好まず、軍隊への助勢等は思ひもよらず、更に此の機に、危険思想を抱いてゐる者は反亂を起さうとまでしたのだ。

一佛國將校の言に「佛兵豈戰を恐れんや。獨りおそる、本國に亂の發せざるか」と。獨逸は聯合軍の爲に、擊破され媾和を結ぶの止むなきに至つた。それは獨逸の大戰後期に於て、一致が缺けて革命の起つた結果であらう。

苟も一國が學つて最後の一人の死するまで、反抗するときは、其れを降伏せしめる事は容易の業ではない。然るに露國にして、我が國は舉國一致國難にあたり、其の團結の固いことは金鐵も類でなかつた。あゝ最早此の國民の状況によつて、戦の

大勢は見えてゐたのである。

「天の時は地の利に若かず、地の利は人の和に若かず」

我等が此の海戰講和を聞いた時、痛切に感じたのは此の點である。

更に面白く感じたのは、日露兩司令長官の意氣の比較である。

我が東郷大將の發せられた信號の一つに

「總べての戦に於て、其の交戦時に、於けるや、味方に不利に戦の展開せる如く見ゆること多し。

されど若し我が軍に四分の利ありて、敵に六分の勝算ある如く見ゆるときは、實に其の戰鬪力匹敵したる時なれば、各員は更に勇を鼓し敵軍を制せざるべからず。或ひは前者に反して、我に六分、敵に四分なる如き形勢に於ては、我既に敵に優勢を示し、壓迫せる際なり。全員奮闘して以て、敵の殄滅を期すべし」と。

所がロゼストヴェンスキイ長官は之と前後して支那の南方にある時、其の率ゐるバルチツク艦隊に訓令を細々と、砲彈、食糧使用量に至るまであたへ、其の終を次の如き悲觀的文句を以て結んでゐる。

「余は近時健康勝れず、最近に於ては甲板歩行も不能なり。且つ、我が參謀某少將は病死せり。形勢頗る樂觀を許さず」と鳴呼、一世を震動せしめた露國の其の最も賴とするバルチツク艦隊は、戦はない以前已に意氣銷沈といふ形だつたのだ。萬里遠征の前途を祝つた送別人の無限の信頼も、將また、露皇帝のよせた期待も、艦隊の惹起した北海事件や、旅順開城及び長途遠征の疲勞に禍されて、空しい過去の夢とならうとしてゐる。

彼は唯一の望を、ヴァジオストツクにつないで、航行を續けてゐる。嗚呼、然るに今又司令官は病床に臥して、新に續く艦隊の望もない。マルヌに於て哲學的退却を行つた有名なるフォツシユ元帥は言つた。「敗軍の状況に想到する指揮官は既に敵に撃破せられたる者なり」と。此の言を以て、日露兩司令官の信號を比較するとき我等は兩者に雲泥の差を見出すではないか。

大佐殿は尙言葉をついで、次の事を説明せられた。

之より先、敵艦隊の支那の南海に現はれて後、杳として消息を絶ち、我が軍の探査も成功せず、僅に敵の病院船の上海入港が手づるとなつてゐた。

時の海軍側の計算によれば、敵はおそらく二十一日以内に、我が近海にあらはれるだらうといふことであつた。然るに、其の期限が迫つても、尙ほ敵の行方は不明であつた。

爲に軍事精通の海軍部中にも「太平洋に出づるにあらずや。」或ひは「豈示谷海峡を過ぐるにあらずや。」「否、津輕海峡に出づる者にあらずや。」等の説が起つた。

所が此の紛然たる群疑に處して獨り黙して、動かなかつたのは、我が東郷大將であつた。

沈着にして、精密なる頭腦の所有者であつた大將は、確たる自信と根據とを以て、朝鮮海峡に敵を待たれ、遂に大敵を擊破せられたのであつた。

かの有名な大將一流の左頭回轉も、敵發砲後尙五分沈默中に突進せられたのも、實に大將の人格其のものの、磐石の如くして水の如き沈着と、燃ゆるやうな攻撃精神による所であつた。

記念すべき、我が歴史の頁に一層の光輝を添へた日露戦争も、又日本海々戦も早や過去となつて、我等は既に、第二十四回

目の五月二十七日と二十八日とを迎へた。

今や世界は、經濟戰へと進出してゐる。島國帝國である日本に、實戰以上の苦勞をかける經濟戰へと歩を進めてゐる。

表面平和を標語とし、又平和を裝うて、猛烈な人種の爭鬭が行はれてゐるのが現世界である。我等は如何にして立つべきか

過去に於て偉大な功績を遺した者の子孫で又第二の國民たる我等の立つべき方法と、決心とは如何。

我が財政をさゝへるには何を以てするか。否世界の經濟界の風靡は如何。惡思潮の防波堤は何か。

彼の日露戦争に血を流した祖先を有する我等は奮起せねばならぬ。此の新たな戦に、我等は未來の東郷大將を立て、そして、

我等は未來の誠忠無比の國民として、正々堂々と戰はう。

漢詩人國分青崖も詠じてゐる。

鏖戰二日日本海。 艇覆將創敵殄滅。

隻手乾坤清虜塵。 絶大勳業泣鬼神。

後昆千載曷可忘。

置國泰山是何人。

(完)



文苑

さ や う な ら

組 田 重 嘉

と私は思はず微笑んだ。日曜の過ぎた朝赤い一枚を剥ぐ時の
佗びしさ……。時たま旗を組合はした祭日をめくつた事もあ
つた。しかし此の頃のカレンダーの何とやせた事！哀愁の秋
もとづくに逝つて今や冷い沈黙の冬が來ようとする。一度過
云ふ音が何故かたまらなく嬉れしいのだつた。青い紙が出る
私は毎朝二本の指でカレンダーを剥いだ。「ピツ……！」と
去の名を以つて葬られた印象を繰り返へすすべのなさに、時

を恨みつゝ私は今日もカレンダーをはぐのだ。永遠の過去から永遠の未来へと時は間もなく歩み続ける。嵐や風や又人間の歡樂や嫉妬や焦躁をも無能力者たらしめて、時はタンクの轟進する様に徐々とは云へ何の躊躇もなく流れる。彼は少年の初々しさを奪つた。如何に強い抵抗を試みようとも時はあらゆる堤を破壊して流れを止めはしない。數々の印象や想ひ出や追憶が無限の愛情を以つて胸に蘇つて來るとともに、若き日のプログラムは次ぎ／＼に終つてゆくのだ。

「年を取つたなあ…………！」

「ハツハツ／＼＼＼＼＼柄にもない…………。」

「くくく／＼言つた何時かのN君の言葉を、空虚な響を持つものとのみ誰が断定し得よう。

華やかな少年の日の純真さが戀しい。「煩」と言ふ字を知らなかつた。「惱」を知らなかつた。春の長い一日を遊び疲れてぼんやり桺側に腰かけて雲を眺めてゐたあの頃がたまらなく懐しい。

「大きくなつたら何になるの…………？」

「……陸軍大將か總理大臣に……。」

あどけない會話がまざ／＼目の前に偲ばれる。憧れの中學生

夢の様にすんだ過去の日、馴れ學びし園よ。お前は充分私の心を培つて呉れた、新しい智識も授けて呉れた。
未知の魂と魂とが五ヶ年の生活でどんなに固く結ばれた事か。

……恩愛の絆……愛情の鎖……

「さやうなら／＼＼＼＼＼。」

さめ／＼流れる別離の涙に二つの眸はぼんやり曇る、校庭のいてふの何とまばらな事！ 寮のボプラの散り果てた姿！ 自然は凋落した、自然是眠るのだ。

今日のカレンダをめくる私の手は振へた。おゝ、その残りの何と少ない事!!

……「二黒大安みづのえ……」私はそれまでじつとみつめた。

一枚一枚中學生活を葬つて行くこのカレンダー。

あゝ、近き日胸にはちきれさうな樂しい思ひ出を持つて、別離のもたらす快い涙の中に學び舎を築立たねばならぬこの身！

「さやうなら／＼＼＼＼＼。」

恵み深きさだめの下に……我等の彦中よ……すこやかに……

となつた時には、どんなに五年生を偉く思ひ大きく思つた事か。しかし今のこの身が五年生ではないか、どこにそんな資格があるのだらう。自分を凝視めて嗤笑したくなる。思へば楽しい五ヶ年であつた。だがそれも今は逝かうとする。十八才の中學生は若い。又二十五才の大學生も若い。けれどもその若きよろこびが同一であるとは云ひ得ないのだ。だん／＼と純真さの去り近く氣配を感じずには居られない。

……「ゴー……」夜汽車が突然虚ろな響を立て鐵橋を通り過ぎた、その振動が暫時に尾を引いて消える様に五ヶ年の印象がストレート私の頭をかすめて消え去る。湖の邊りに櫻貝で書いた砂文字を大きな波が打ち寄せて一度に洗ひ去ると同じ様に、種々の思ひ出がはつきりとスクリーンに映つても直ちに消滅する。

「×××の發表が出たが物理があるので弱つた…………」「…………へ行きたいが代數が不得手だから…………」「あゝ、もう窮じた！……」「浪人生活…………？」

楽しい中學生活は逝つた。さうしたこんな日許りが續く様になつた。

「樂しかつたスクールライフよ、さやうなら。」

筆のままに

杉山甚一

一、理 想

現代中學生の言つてゐる理想は空想に近い。それ故眞剣味がないからすぐ消滅する、まるで廢言だ、社會に對してはまだ一年生だ、原因は社會と沒交渉の爲生きた學問をしてゐないからだ。吾人はかく言ふ「現實の中に理想を求めよ」と。

二、理 屈

世間にはよく理屈を言ふ人がある。理屈も平々凡々の人間界ではまだ効能がある。何故かと言ふに、甲と言ふも乙と言ふも大した變りはない。皆園子理屈であつて何等取り得がない。それ故本の一冊も人より多く讀んだと思つてゐる青二才は理屈をよく言ふのだ。

三、情 操

よい風景に接した時にこの趣を解し得ない否賞し得ない人ほどみじめな人はない。一生金をためる事ばかりにあくせく